発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第１回】ねがいの結びめを求めて

河合隆平
金沢大学

かわい　りゅうへい
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著書に『発達保障ってなに？』共著（全障研出版部）など。

入学式は涙の別れ

今から40年ほど前、養護学校の義務教育制度が完全実施されておらず、障害のある子どもたちの多くが「教育不可能」とみなされて学校に行くことができなかった時代の話です。一人の母親の声を聴いてください。

やがて入学式の当日となりました。主人とともに、いいようのない不安の中に、学校からいわれた品々を積みこみ、まだ一度も走ったこともない丹後路を北へ北へと走り続けました。

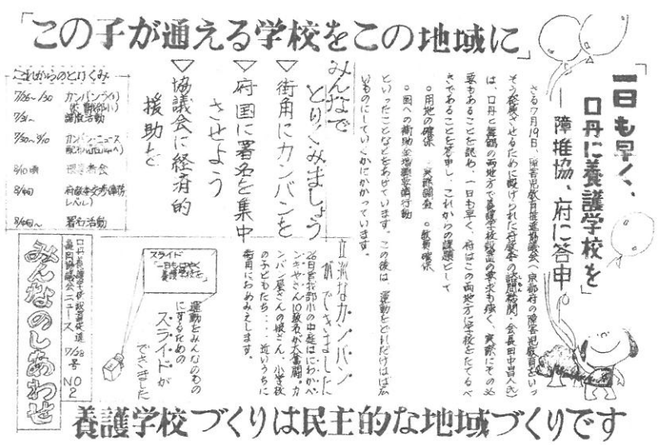
長い道中、好きなおやつも食べず、子どもは何を話しかけても話し返してはくれませんでした。学校へ着いても、自分の席にすわろうともせず、ただおびえるように私に寄りそい、必死に着物を握りしめているのです。あまりの遠さに子ども心にも不安を覚えていたのでございましょう。「お母ちゃん、帰ったらいやや」とだだをこね、なだめたり言いふくめても、なおも泣き叫び、気でも狂ったように追いすがる、その手をやっとの思いで振り切り、寄宿舎の先生にお願いをして、あふれ落ちる涙をぬぐいもせず帰途につきました。どうかお母ちゃんを許してと、幾度も幾度もわびながら…。（口丹（くちたん）養護学校設置促進協議会）

この子どもは家から遠く離れた養護学校の中学部に入学し、寄宿舎での生活を始めることになっていました。その学校とは、養護学校義務制完全実施（１９７９年）に先がけ、教育から排除されてきた障害の重い子どもたちの受け入れを宣言した京都府立与謝の海養護学校（１９７０年本格開校）です。その取り組みは、同時代の「権利としての障害児教育」にねざした学校・地域づくりや教育実践のモデルとして注目されました。当時、京都北部には与謝の海養護学校が、南部には向日ヶ丘養護学校（１９６７年開校）がありましたが、その子が住む口丹地域はその中間にあっていずれの学校からも遠い「谷間」の地域だったのです。

誰もが待ちわびた入学式ですから、学校には「入学おめでとう」の笑顔があふれていたことでしょう。しかし、家の近くに養護学校がない子どもたちにとって、入学式は家族との涙の別れの日だったのです。親たちは、やっとの思いで養護学校にたどり着いたけれども、「はたしてこれがすべての国民に与えられた義務教育といえるのだろうか。なぜ、障害があるからといって幼い子どもとこんなにも離れて暮らさなければならないのか」と苦悶せずにはおれませんでした。

入学後も苦悩や不安は続きます。近所には「あんな子どもを預けるなんてひどい親だ、鬼のような人だ」と陰口を叩く人もいました。休日のたびに子どもを迎えにいくにも、学校が遠すぎてたくさんの労力とお金がかかります。わが子の送迎のために運転免許をとり、厳しい家計をやりくりして自家用車を購入した家庭もありました。学校行事に毎回出席することもできず、「楽しい子どもの力いっぱい発表する姿さえ見てやることができない」という苦悩も聞かれました。

教育へのねがいから社会の矛盾をとらえ返す

東京へ行くのでさえ三時間余りで行けます時代に、学校から少し調子が悪いと聞いても片道三時間、四時間もかかるのでは、ちょっと見に行こうと思っても、二の足をふみます。鬼になったつもりで「先生よろしくたのみます」とお願いするときの気持ち、平気のように聞こえても、心の中の思いは本当につらいです。…仕方ない子どものためという言葉であきらめてはいるものの、親の気持ちは仕事をしていても上の空ということもたびたびでした。あまりにも学校が遠すぎます。…〔養護学校の教育が〕すばらしいだけに、よけいにこんな学校が近くにでき、どうしても誰もかも、みんな行ける学校にしてほしいのです。（口丹養護学校設置促進協議会）

社会には経済的・物質的な豊かさが広がっているにもかかわらず、障害のある子どもには必要な教育や当たり前の生活すら保障されない。子どもを養護学校に行かせるために、仕事や家族の生活を犠牲にしなければならない。わが子はどうにか養護学校に入学できたけれども、